SOU 奏

Autumn 2026



VOL. 66

CONTENTS

1 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ開催報告
9 「ゆる音楽学ラジオ」パーソナリティが振り返る！ フェスタファイナルラウンド
11 グランプリ・コンサート2026 モータス・クァルテット
13 プロデューサーが往く！ ARD国際音楽コンクール
14 トップアンサンブルシリーズ ほのカルテット
15 民族楽器で旅する世界 vol. 7 ロシア
17 作曲家の部屋 vol. 8 バッハとライプツィヒ&ケーテン
19 名曲誕生！ vol.6 ショスタコーヴィチのピアノ五重奏曲

世界の才能が、大阪で響き合う。ここが室内楽の最前線

第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 開催報告










コンクール

世界の若手俊英が集う、
最高峰の国際室内楽コンクール
2026.5/17(日)▶24(日)

フェスタ

クラシックから民族音楽まで、
世界のアンサンブルが響演する音楽祭
2026.5/9(土)▶13(水)

会場：**住友生命いずみホール**

◎フェスタ1次ラウンド……5/9[土] 富山県高岡文化ホール／三重県文化会館
◎コンクール 東京披露演奏会……5/24[日] サントリーホール ブルーローズ

新緑まぶしい5月、16日間にわたり「第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」が開かれました。
コンクールには世界19カ国・地域から76団体の応募があり、予備審査を経て9カ国から15団体が参加しました。
また、フェスタには世界21カ国・地域から59団体の応募があり、予備審査を経て9カ国から15団体が参加しました。
世界各地から集った音楽家たちが奏でる豊かな響きが、会場を鮮やかに彩りました。

主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団
共催（フェスタ1次ラウンド）：公益財団法人 富山県文化振興財団／公益財団法人 三重県文化振興事業団
後援：外務省／文化庁／大阪府／大阪市／日本演奏連盟／住友生命いずみホール／関西経済連合会／大阪ビジネスパーク協議会／読売新聞社
協賛：岩谷産業／ NTT西日本／大阪ガス／大林組／鹿島建設／関西電力／きんでん／サントリーホールディングス／ JR西日本／ JTB ／清水建設／住友生命／住友電気工業／積水化学工業／千趣会／ダイキン工業／大成建設／竹中工務店／日建設計／ハウス食品グループ／非破壊検査／フジテック
フェスタ ファイナリスト賞サポート：一般財団法人 小野文化財団
賛助：読売テレビ
提携協力：Britten Pears Arts ／ Music in PyeongChang ／ Quatuors à Bordeaux ／ String Quartet Biennale Amsterdam ／ Verband der Streichquartette und weiterer Kammermusik-Ensembles VdSQ e.V. & Förderverein Festival4 e.V. ／ KLANGERLEBNIS e.V. ／ The Sommerliche Musiktage Hitzacker ／ Wolfgang Sawallisch Foundation and Karl Amadeus Hartmann-Society/Hartmann-Center
特別協力：一般社団法人 MK記念会



コンクール 審査委員長
モニカ・ヘンシェル
ヴィオラ／ドイツ
ヘンシェル・クァルテット

今回のコンクールは、国際的に見ても極めて高い水準に達していました。大阪に集った15の参加団体はいずれも卓越した芸術性を備え、舞台上で深みのある音楽を披露しました。その礎となったのは、国際的に活躍する審査委員の豊かな専門性、そして10年以上にわたり本コンクールの成長を支えられた前審査委員長・堤剛先生が示されたヴィジョンと方向性です。
おそらく音楽作りの中で最も民主的な形態である室内楽は、耳を傾けること、対話すること、責任感を共有することによって成り立ちます。それは舞台上だけで完結するものではありません。アンサンブルの長期的な成長にとって、聴衆は極めて重要な役割を持っています。若いアンサンブルが国際的な立場を築くまでは、長い年月と多くの励まし、配慮、信念が必要です。私たちがここで目の当たりにしたのはただのコンクールではなく、そのような旅路の出発点、あるいは途上なのです。
会場やオンラインで演奏に耳を傾けてくださった皆様、全ての参加団体、素晴らしい審査委員の同僚たち、コンクール実現に多大なるご協力を頂いた皆様に、心より感謝申し上げます。



フェスタ 特別審査員
呉 信一
トロンボーン
京都市立芸術大学 名誉教授

フェスタ最大の魅力は、なんといっても“多様性”です。今回も世界各地の数多くの団体から応募が寄せられ、予備審査を通過した出演者による、幅広い音楽を皆様にお届けすることができました。さらに、今回から「舞」と「歌唱」を審査対象に加えたことで、これまでにはなかった新たな表現もお楽しみいただけたことと思います。
一般審査員の皆様から特に多くの支持を集めてファイナルラウンドに選出された4団体は、それぞれの活動拠点国の雰囲気を感じさせる素晴らしい演奏を披露してくれました。今回のフェスタでは民族楽器を演奏するアンサンブルがファイナルに進まなかったことは少し残念ではありましたが、どの団体が奏でる音楽も個性に溢れていて、心揺さぶられる瞬間が多々ありました。開催にあたり、一般審査員としてご参加いただきました皆様、ご鑑賞くださった皆様に御礼申し上げます。また、1次ラウンドの開催に際し多大なるご協力をいただいた富山県高岡文化ホール、三重県文化会館の皆様にも感謝申し上げます。

YouTubeで公開中

コンクール&フェスタ　各団体の演奏

コンクールの全審査演奏と、フェスタの1次ラウンド（富山・三重）を除く演奏は、全てYouTubeでライブ配信されました。コンクールの演奏はアメリカのクラシック音楽関係大手ウェブメディア、Violin Channelでも配信されました。
審査日および演奏団体ごとに分けた演奏動画を、大阪国際室内楽コンクール&フェスタの公式YouTubeでご覧いただけます。

大阪国際室内楽
コンクール&フェスタ
YouTubeアカウント

読売テレビ特別番組

「第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の模様が、読売テレビの特別番組として7月に放送されました。ステージでの演奏はもちろん、舞台裏の様子やインタビューを通じて演奏者たちの素顔にも迫っています。
番組は全編、読売テレビのYouTubeでご覧いただけます。見応え・聴き応えともに十分。ぜひお楽しみください！



コンクール特別番組
（7/7放送）



フェスタ特別番組
（7/21放送）

第12回大阪国際室内楽コンクール 入賞団体

第1部門（弦楽四重奏）

第1位



モータス・クァルテット（オーストリア）
Motus Quartet（Austria）



ティム・デ・フリース（ヴァイオリン）
カルラ・クリシュ（ヴァイオリン）
エリン・カーター・ピッツ（ヴィオラ）
ドモンコス・ハートマン（チェロ）

ウィーンを拠点とする平均年齢26歳（コンクール当時）のクァルテットが、第12回第1部門の覇者に。4人の個性を生かしつつ一つのアンサンブルとして溶け合った美しいサウンドと、作曲家の意図を深く追求する音楽性が評価されました。

＼2026年11月 グランプリ・コンサートに出演！／ （詳細は11ページ）

第1位をいただける予想は全くしていませんでしたが、選ばれて本当に幸せで、幸運だったと思っています。バランスよくすべての課題曲を弾いてきたことが、今回の結果につながったのではないかと思います。各ラウンドでの演奏を楽しむことができました。
日本の気候に合わせた調整には苦労しましたが、弦も弓も湿気に強いものを選んできてよかったです。舞台で演奏をし始めると、そうした苦労はすっかり忘れていました。グランプリ・コンサートで再び日本で演奏することがとても楽しみで、待ちきれません。

第2位

カルテット風雅（日本）
Quartet Fugue（Japan）



落合 真子（ヴァイオリン）
小西 健太郎（ヴァイオリン）
川邉 宗一郎（ヴィオラ）
松谷 壮一郎（チェロ）

第3位

クァルテット浬（オーストリア）
Quartet KAIRI（Austria）



佐々木 大芽（ヴァイオリン）
三田 悠（ヴァイオリン）
ジリャン・シー（ヴィオラ）
坂井 武尊（チェロ）

特別賞

今回のコンクールでは、過去最多となる5カ国8つのコンクール・フェスティバルと提携し、各特別賞を設定しました。それぞれの特別賞に選出された団体を現地に派遣することで、コンクール後もキャリア支援を行います。

ボルドー弦楽四重奏フェスティバル賞［フランス］

Vibre! Bordeaux International String Quartet Competition

2027年5月に開催される「ボルドー弦楽四重奏フェスティバル」に参加し、マスタークラスを受講・コンサートへ出演

カルテット風雅（日本）

ブリテン・ピアーズ・アーツ賞［イギリス］

ブリテン・ピアーズ・アーツが2027/2028年シーズンにイギリスで開催するブリテン・ピアーズ・ヤングアーティスト・プログラムに参加

BRITTEN PEARS ARTS

モータス・クァルテット（オーストリア）

ストリング・クァルテット・ビエンナーレ・アムステルダム賞［オランダ］

String Quartet Biennale Amsterdam

2028年1月にアムステルダムで開催される「ストリング・クァルテット・ビエンナーレ・アムステルダム」に出演

モータス・クァルテット（オーストリア）

ミュージック・イン・平昌賞［韓国］

2027年に開催されるミュージック・イン・平昌に参加

대관령음악제 Music in PyeongChang

オイフォリー・クァルテット（ドイツ）

第2部門（ピアノ三重奏／ピアノ四重奏）

第1位



トリオE.T.A.（ドイツ）
Trio E.T.A.（Germany）



ティル・ホフマン（ピアノ）
エレネ・メイパリアニ（ヴァイオリン）
ナジャ・ライヒ（チェロ）

2023年のコンクールにも出場し、2次ラウンドまで進んだドイツのトリオE.T.A.。その後、2年前にチェロ奏者が交代し、今回の大阪でのコンクールに向けてすべてを懸けて準備を重ねてきたそう。前回の経験も生かし、どのラウンドでも安定感あふれる演奏を披露して見事第1位に輝きました。

＼2027年秋、グランプリ・コンサートに出演！／

特にファイナルで披露したシューベルトのピアノ三重奏曲第2番は、ベストな演奏ができたと思っています。この楽曲の、特に最初から中盤にかけての演奏を審査委員の方々に評価していただけたのではないかと思います。次の目標はもっと日本での演奏機会を増やすことです。コンクールでは緊張感のある演奏でしたが、次の機会は競い合う場ではないところで、自分たちの演奏を日本の皆さんに楽しんでいただけたら嬉しいです。

第2位

オイフォリー・クァルテット（ドイツ）
Euphorie Quartet（Germany）



ダニエル・シュトライヒャー（ピアノ）
富田 心（ヴァイオリン）
ユリヤ・ヴァヴロフスカ（ヴィオラ）
クララ・イリフバー（チェロ）

第3位

ダヴィドフ・トリオ（ドイツ）
Davidoff Trio（Germany）



ヨナ・ソフィア・ユッツィ（ピアノ）
ヨハネス・エヴァルド・ヴェンデル（ヴァイオリン）
クリストフ・ベンヤミン・ランプレヒト（チェロ）

ザ・ゾマーリシェ・ムジークターゲ・ヒッツァッカー・デビュー賞［ドイツ］

2027年7月31日から8月8日に開催される「ザ・ゾマーリシェ・ムジークターゲ・ヒッツァッカー」のコンサートに出演

Sommerliche Musiktage Hitzacker

モータス・クァルテット（オーストリア）
トリオE.T.A.（ドイツ）

第12回大阪国際室内楽コンクール アンバサダー賞［ドイツ］

VdSQ & Festival4（www.vdsq.de）が2028年に開催する室内楽フェスティバルに、本コンクールのアンバサダーとして出演

STREICHQUARTETT BIENNALE
VERBAND DER STREICHQUARTETTE
FÖRDERVEREIN FESTIVAL4

クァルテット浬（オーストリア）
クァルテット・ウェルテル（イタリア）



クァルテット・ウェルテル

サヴァリッシュ室内楽賞［ドイツ］

ウォルフガング・サヴァリッシュ財団（グラッソー）とカール・アマデウス・ハルトマン・センター（ミュンヘン）が運営する2028年のコンサートやマスタークラスに参加

クァルテット浬（オーストリア）

Wolfgang Sawallisch STIFTUNG
Karl Amadeus Hartmann - Gesellschaft e.V.

クランゲルレブニス賞［ドイツ］



2027年1月27日に開催される「テルツァー入賞団体サミットフェスティバル」のコンサートに出演

モータス・クァルテット（オーストリア）

弦楽四重奏の新曲委嘱



第1部門3次ラウンド課題曲

酒井健治：弦楽四重奏曲第2番「フローティング・パーティクル」

（第12回大阪国際室内楽コンクール委嘱作）

第12回大阪国際室内楽コンクールでも、課題曲に新しい弦楽四重奏曲を委嘱しました。今回は国内外で評価が高まる大阪出身の作曲家・酒井健治さんに作曲していただき、第1部門（弦楽四重奏）3次ラウンドの課題曲として設定しました。
3次ラウンド前日の5月20日には、酒井さんを招き、3次ラウンドへ進出した5団体と各25分間のディスカッションセッションを行いました。参加団体は質疑応答を通して作品への理解を深め、翌日の審査演奏に臨みました。翌21日の3次ラウンドでは、冒頭に酒井さんによるトークセッションを開催。聴衆も作品の背景や聴きどころを知った上で、各団体の演奏に耳を傾けました。
5団体はそれぞれの解釈で、作品の多彩な魅力を表現しました。この楽曲が大阪発の新たな弦楽四重奏レパートリーとして、これから多くのアンサンブルに受け継がれていくことを期待しています。



コンポーザーズ・ノート

弦楽四重奏曲第2番「フローティング・パーティクル」は第1番「フローティング・フェイズ」と根本的な着想が同じでありながらも異なる実が結実したものである。弦楽器の音色は弓と弦が触れる角度や位置、弓圧によってロングトーンであっても極めて流動的であり、本質的な意味において、弦楽器の音の発生から着想される楽想とは何だろうかと考え書いた作品群となっている。
第1番はびわ湖ホールによる委嘱作品であり、纏まった楽想がゆったりと、滋賀県比叡山を想起させる様に別の楽想に移行していくといった様相を示すが、今回の作品ではミクロの世界、粒子の流動をテーマに書いた作品である。それは例えばメロディーによって表現されるというよりも、空間に投げかける様な単音群によるものである。全曲を通して、細かい単音がやがて動機となり主題となった果てに空間に霧散されるといった音楽となっている。

大阪チェンバーミュージック・ホライゾン2026

コンクール参加団体が住友生命ホールを飛び出し、地域と協働したコンサートを開催！
演奏者のすぐ近くで、お客様に音楽を堪能していただきました。

読売テレビ 10 plaza

5月20日(水) トゥリクム・クァルテット（スイス）
5月21日(木) エリニス・クァルテット（アメリカ）



トゥリクム・クァルテット



エリニス・クァルテット

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団、読売テレビ

今福音楽堂

5月21日(木) クァルテット・ウェルテル（イタリア）
アスタティーン・トリオ（イギリス）



クァルテット・ウェルテル



アスタティーン・トリオ

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団、一般社団法人Reise

室内楽に関するアート作品の展示

シルク・カリグラフィー「間の風景」／メヒティルト・アッカーマン

モニカ・ヘンシェル審査委員長の友人でもあるスイス在住のアーティスト、メヒティルト・アッカーマンさんが、室内楽（Chamber Music）や今回の大阪国際室内楽コンクールへの道筋に関するテキストを集めて作品を制作。コンクール期間中、住友生命いずみホールのロビーに展示しました。一つ一つのテキストが幹から枝葉を伸ばし、樹木の形を成しています。

作品についての詳細はこちらのサイトからご覧いただけます。





第12回大阪国際室内楽コンクール 審査委員

第12回大阪国際室内楽コンクールの審査委員には、世界各地で活躍する錚々たる音楽家たちが集いました。アンサンブルの音楽性や表現力を多角的な視点から見つめ、審査結果を導き出しました。
ここでは、4名の審査委員に、本コンクールの印象や魅力、存在意義などについて振り返っていただいたコメントをご紹介します。

左から
サンウォン・ヤン（韓国／チェロ）、野平 一郎（日本／ピアノ）、元渕 舞（アメリカ-日本／ヴィオラ）、
相沢 吏江子（アメリカ-日本／ピアノ）、モニカ・ヘンシェル（第12回審査委員長、ドイツ／ヴィオラ）
澤 和樹（日本／ヴァイオリン）、オリヴァー・ヴィレ（ドイツ／ヴァイオリン）
アリステル・テイトゥ（イギリス／チェロ）、ウェイガン・リ（アメリカ／ヴァイオリン）　※敬称略



相沢 吏江子（アメリカ-日本／ピアノ）

大阪に来れること自体、みんなもう既に予備審査を経て選ばれている。そんなレベルが高い中、落ちて直ぐに家に返されるのと違って、次のステージに立てなかった人たちにも演奏できる場をコンクール側が与えてくれて、精神的にもポジティブになれる場を作り上げているところに、すごく感動しましたね。

パーティーや入賞団体披露演奏会でも、結局はみんなが仲良く話していて、それがいい出会いになっている。大事なのは、こういうコンクールの場でいろいろな参加者と知り合うこと。音楽の世界は狭いから、20年後にまたどういう仕事をすることになるか判らない。交流の場として、ひとつひとつの機会を大事にしていってもらいたいです。私自身の経験からも、それは本当に貴重だと思います。

若いグループはみんな情熱を持っているし、次の目標がある。でもやっぱり、まだ20代から30代前半。ここから難しくなるのが、人生観です。それぞれのメンバーが持つ音楽の外の人生観がちょっと変わってくると、いろいろ苦労しないといけない部分もある。でもやっぱりそれも、音楽家として歩んでいくのに必要な経験。みんな山あり谷ありだけど、その中でもポジティブに進んでいける強さを持たないといけない。



オリヴァー・ヴィレ（ドイツ／ヴァイオリン）

まずなにより、このコンクールでは審査委員が最初の決定を下す前に全団体が2回の審査演奏を披露できる点が素晴らしいと思いました。それから、ピアノ三重奏が科目にあるのも良いですね。世界的に見ても、このジャンルのコンクールは多くないですから。

美しい響きのコンサートホールで、まるで大規模な音楽祭のような室内楽イベントとして開催されるのも素晴らしかったです。他のコンクールでは、小さなホールから始まり大きなホールへと移動していくことが多いですからね。演奏者にとっても審査委員にとっても、音楽を楽しむ上でも、いずみホールでの開催は高く評価すべきですよ。

それから投票システム。とてもシンプルで優れたシステムで、イエスかノーか非常に明確な判断が下せます。そして議論が必要な場合はあとで話し合いをする。このやり方はとても気に入りました。

演奏できるグループが（各部門それぞれ）8つしかない事実はいかんともしがたいものの、最終的にこのコンクールはフェスティバルとして成功したのは喜ばしいことです。この街のこの素晴らしいコンサートホールで、完璧な組織で、まるでフェスティバルの雰囲気。でも残念ながら、私たちは決断を下さなければならないんですけどね（笑）。



野平 一郎（日本／ピアノ）

大阪はコンクールの特色として、課題曲の時代がとっても広い。いろいろな時代の表現に適応できないと賞は取れない。作曲家にとって、それはとても嬉しいことです。普通は大体、20世紀の前半ぐらいで課題曲が終わって、我々の創作との断絶ができてしまうと僕は思ってるんです。でもここは課題曲が発表された時点で、非常に幅広い。

一方、弦楽四重奏にとって最も根幹となるレパートリーは、ファイナルラウンドなど重要なところで弾く。若い人たちのそれに適応する能力が、ものすごく高くなってきた。昔は日本だと、20世紀初頭の作品まではなんとか追っても、そこを超えるのが技術的にも表現力としても難しかった。でも今や、それをやすやすと乗り越える。

例えば今回の委嘱作曲家だった酒井さんの作品、ほぼ全てが団体としての表現を見つけていた。スコアを見た時に、ああこの団体はこういうところに注目して演奏している、という解釈にまでみな踏み込んでいました。コンクールはいちばん人に伝えやすい場ですから、そこで酒井作品がこれだけ成功を収めたのは非常に良かった。観客が喜んでくれただけでなく、審査委員も全員喜んでるし、スタッフも喜んでいます。すべてがうまくかみ合った。



サンウォン・ヤン（韓国／チェロ）

審査委員団は素晴らしい雰囲気でしたよ。本当に友好的で、お互いを尊重し合っていたと思います。作曲家、ピアノ奏者、ヴィオラ奏者、チェロ奏者、ヴァイオリン奏者がいる9人の審査委員なので、審査ではさまざまな意見が出てきます。でも、それがとても良いことなのです。皆が異なる視点から演奏に耳を傾け、最も協力的な結果を得ることができました。議論するときにもお互いを完全に理解し、尊重し合い、結果として私たちは違う聴き方をするようになる。これは良いことです。

私たちは非常に前向きで建設的な方法で議論することができ、コンクール終了後に参加者たちに会ったとき、話し合った方向でフィードバックを与えることもできました。とても嬉しく、興味深い経験でしたね。

コンクールは若い音楽家を支援するために存在します。ですから、私たち審査委員には2つの役割がありました。賞を与えるだけではありません。若い音楽家たちがどうすればもっと成長できるかを見極める必要もある。私たちは、参加者たちの秘めた可能性を見抜き、長期的にどのような支援ができるかを判断するために、ここ大阪に来たのです。

取材●渡辺 和（音楽ジャーナリスト）
国際基督教大学博士課程前期修了。室内楽や現代音楽を中心にフリージャーナリストとして活動。演奏家インタビュー、コンクールレポートなど「音楽の友」等に寄稿。著書に『クァルテットの名曲名演奏』（音楽之友社）、『ホールに音楽が刻まれるとき』（ぎょうせい）、共著に『黒沼俊夫と日本の弦楽四重奏団』（柏の森書房）他。

第12回大阪国際室内楽フェスタ 入賞団体

メニューイン金賞



ザ・モーニン・フロッグズ(アメリカ)
The Moanin' Frogs(USA)



エドワード・グッドマン(ソプラノサクソフォン)
ゲイブリエル・ピケ(アルトサクソフォン)
ジェフ・シグフリード(テナーサクソフォン)
ジョナサン・ホルティング・コーエン(テナーサクソフォン/ソプラニーノサクソフォン)
ジェフリー・ラング(バリトンサクソフォン)
ルーカス・ホプキンズ(バスサクソフォン)

クラシック、ジャズ、ポップスと多彩なジャンルを自在に行き来し、オペラ歌唱やフロアダンスも織り交ぜた斬新なパフォーマンスを披露したアメリカのサクソフォン六重奏団。一瞬たりとも目が離せないステージで各会場を魅了し、最多票を獲得して見事メニューイン金賞に輝きました。

＼2028年秋、グランプリ・コンサートに出演！／

美しい響きのホールで、素晴らしい観客の皆様の前で演奏できたことを、大変光栄に思います。私たちは、ハイレベルな演奏をお届けするだけでなく、多彩な音楽を通して聴衆の皆様に楽しんでいただくことを大切にしています。その両方を実現できたことが、今回の受賞につながったのではないかと感じています。また、(順番決めのくじ引きの結果)私たちは3度の審査全てで投票ブロックのトップバッターとして演奏することになり、そのおかげで、他の参加団体の演奏を聴くことができました。「こんなに素晴らしい音楽を聴いたのは初めてだ」と感じる瞬間が何度もあり、そうした出会いも、大阪国際室内楽フェスタに参加した中での大きな喜びのひとつでした。

一般審査員コメント
「観客を飽きさせない夢中にさせる構成、演出が全て実力に裏付けされたもので、存分に楽しめました」
「バッハ『トッカータとフーガ』は本当のパイプオルガンの音色を再現されていて驚きました！」

ファイナリスト賞 supported by Ono Culture Foundation (3団体)



デュオ・カロリーナ&イヴォ(ポーランド)
イヴォ・イェディネツキ(クラシカルアコーディオン)
カロリーナ・ミコワイチック(ヴァイオリン)

一般審査員コメント
「音が会話しているようでお互いの掛け合いを楽しめた」「クラシカルアコーディオンの伴奏での『ツィガーヌ』がピアノとは微妙に違う音で演奏されているのがお洒落で印象的でした」



クワチュール・アヴェナ(フランス)
ニコラ・アラード(ソプラノサクソフォン)
ファビオ・チェザーレ(アルトサクソフォン)
辻本 純佳(テナーサクソフォン)
アダム・キャンベル(バリトンサクソフォン)

一般審査員コメント
「フォーメーションやアレンジのセンスが良く、フランスのエスプリを感じた」「サクソフォンでの『春の海』が圧巻！」



クレヴェール・クァルテット(ロシア)
イゴール・ボトゥヴィン(チェロ)
マキシム・アクチュリン(チェロ)
アンドリイ・ユフィモフスキ(チェロ)
ラバニ・アルダンゴル(チェロ)
※都合によりラバニ・アルダンゴルが来日できなくなってしまったため、第12回大阪国際室内楽フェスタでは代理でイリヤ・イズマイロフが演奏しました。

一般審査員コメント
「4人のチェロのなんと奥深いハーモニーでしょう」「『ああ広き野よ』は胸が詰まりました。何かを訴えかけられているように感じました」

特別賞

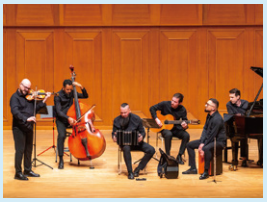
セミファイナルラウンド出場団体の中から、特別審査員の協議により選出された団体に授与されました。※パーカッションアンサンブル賞は該当なし

フォークロア賞



エルヴィラ・ドンスカヤ・アンド・ラマン・シチョヴ・デュオ(ロシア)

キーボードアンサンブル賞



コンチェルティーノ・アコーディオン・バンド(モルドバ)

ストリングアンサンブル賞



ノタシルヴァー(ロシア)

ウィンドアンサンブル賞



ノルディック・エコー(ドイツ)

ニューウェイブ賞



クワチュール・アヴェナ(フランス)

今回から「歌唱」と「舞」を取り入れた演奏も審査対象に

フェスタの募集対象は2人から6人までのアンサンブルで、楽器の組み合わせやジャンルは自由。今回からは、楽器演奏を主体としながら「歌唱」や「舞」を取り入れた表現も審査対象とし、より多彩なパフォーマンスが繰り広げられました。



カルテット・アンシャンテ（フランス）はクラリネットアンサンブルとヒップホップダンサーがコラボ



ディアント・リード・クィンテット（オランダ）はバスーン奏者が歌声も披露

フェスタ特別審査員



左から
山本 祐ノ介（チェロ）、片岡 リサ（箏）、呉 信一（トロンボーン）、河野 正孝（オーボエ）
※敬称略

1次ラウンドは富山・三重で同日開催！

前回2023年に続き、今回も1次ラウンドは富山・三重の2か所で実施。大阪以外にお住まいの方にもフェスタの多様な音楽をお聴きいただきました。

5月9日（土）［同日に開催］



〈富山県高岡文化ホール〉
レゼサンス（ドイツ）



〈三重県文化会館〉
ゼッド（アメリカ）

大阪でEnsemble SHOWCASEを開催♪

今回初めての試みとして、住友生命いずみホールで「Ensemble SHOWCASE」を2回開催しました。出演したのは、惜しくもセミファイナルラウンドへ選出されなかった計7団体。より多くの演奏機会を設けるとともに、フェスタ期間の最後まで大阪に滞在してもらうことで参加団体同士の文化交流にもつながりました。

5月11日（月）



メディヌカイ・アンサンブル（スペイン）

5月12日（火）



ユーフォリア・デュオ（中国）



＼たくさんの一般審査員の皆さまにご協力いただきました／

大阪国際室内楽フェスタでは、初回から一貫して、公募で集まった音楽愛好家の皆さまによる投票で審査を行っています。今回は、4つの審査に延べ約630人の方々が一般審査員として参加してくださいました。ご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました！

一般審査員参加者アンケートより

- ふだん目にすることのない民族楽器も見ることができ、貴重な時間になりました。少ない人数のアンサンブルは、奏者の息づかいも聞こえ、音で会話している様子が感じられました。
- こんなに真剣に音楽を聴いたのは久しぶりです。「自分が1票をどこに入れるか」を考えながら参加していたからだと思います。
- 多彩な音楽の楽しみかたや裾野を広げる素敵なイベントだと思います。審査については「日本のみなさんに届けたい音楽という観点で選ぶ」という運営の方の説明がわかりやすく、心に残りました。
- 改めて音楽の力の偉大さ、国を超えて繋がれることに感動しました。



表彰式・記念パーティーの最後に、参加者で記念撮影。国籍や音楽ジャンルを越えて、フェスタに集った音楽家同士の交流が広がりました



「ゆる音楽学ラジオ」パーソナリティが振り返る! 第12回大阪国際室内楽フェスタ ファイナルラウンド

ゆるく楽しく音楽の話をする人気チャンネル「ゆる音楽学ラジオ」(YouTube・ポッドキャスト)の パーソナリティである浦下さん・黒川さんが、第12回大阪国際室内楽フェスタで一般審査員を務めてくれました。 ファイナルラウンドで演奏した4団体の印象、そして投票団体をどんな風に決めたのか…… 審査後の興奮冷めやらぬお二人が繰り広げた、熱い感想戦をどうぞ!

大阪で審査員デビュー! 室内楽とは?



クラシック音楽が大好きな チェリスト **浦下拓巳さん**

音楽初心者、民俗学が専門で モンゴルや中央アジアに詳しい **黒川畳車(ひらく)さん**

浦下:大阪で行われた第12回大阪国際室内楽フェスタに行ってきました!

黒川:「室内楽」ってなに?音楽のジャンルのこと?

浦下:クラシック音楽の1ジャンル。オーケストラは室内楽ではないんですよ。

黒川:でも、オーケストラも室内でやるよ?

浦下:そう、たいてい室内なんですけど(笑)。室内楽とは一般に、ひとつのパートを一人で担当する小編成の音楽のことをいいます。

黒川:わかった。私が言ってたのは「屋内楽」だ。オーケストラも屋内でやるけど、コンサートホールって「部屋」って感じじゃないもんね。室内楽って、部屋の中で演奏できるくらいの小編成の音楽なんだ。

浦下:そうです。ただこの大阪国際室内楽フェスタでは、クラシックに限らずどんなジャンルでも、2人から6人の楽器編成なら参加OK。ということで、色んな編成・ジャンルの音楽を聴いてきました。しかも今回は聴くだけではなく、フェスタの一般審査員として、金賞を決めるお手伝いもしてきました。審査員デビューです!

ファイナルラウンド出場 4団体のステージ

浦下:ファイナルラウンドの出演団体とその演奏についてご紹介したいと思います。まずはアメリカのサクソフォン六重奏、**ザ・モーニン・フロッグズ**。「楽しませよう」というサービス精神にあふれた団体でしたね。ジャズ、クラシック、アイルランド民謡まで、様々なジャンルを違う表情で見せてくれました。



黒川:曲目の構成も良かった。最初にバッハの「トッカータとフーガ」で、骨太で浮足立っていない感じを見せてきた。そこからぐっと盛り上げて、最後は潔く終わる感じ。

浦下:2曲目のロッシーニ「セビリアの理髪師」より「私は町の何でも屋」では、テナーサックスの方が歌っていましたね。今回から、器楽がメインであれば、歌や舞を取り入れたアンサンブルも参加できるようになったそうです。世界には宗教的な要素と結びついた歌や踊りを含む小編成のアンサンブルも多いので、それらを広く受け入れたフェスタにしたいということで。

黒川:4曲目の「イン・ザ・ムード」。途中で段々音が小さくなっていくところ、演奏しながら体勢をどんどん低くしていって驚いた。

浦下:極めつきは、後ろ向いたと思ったら背中をフロアに付けて足を上げだして!

黒川:仰向けでよく吹けるなぁと思いながら聴いていたら、音はちょっとかすれてる?明らかに犠牲にしているものはあるんだけど(笑)。圧巻のパフォーマンスでした。

浦下：続いてポーランドから、息ぴったりの**デュオ・カロリーナ&イヴォ**。1曲目のショパン「ノクターン」で一気にクラシックの世界に持って行ってくれました。ヴィヴァルディの「夏」ではアコーディオンが火を噴いていましたね。



黒川：第3楽章の嵐の空気感をアコーディオンが作り出していました。風を使って音を出す楽器だからなのか、嵐を表現する場面にとても合っていた。

浦下：デュオ・カロリーナ&イヴォとザ・モーニン・フロッグズでは、音楽の表現の方向がそれぞれ違うのも印象的でした。いろんな音楽のやり方があるなと思わされましたね。

黒川：観客に対してどういう向きの力を与えているか、だよね。ザ・モーニン・フロッグズは自分たちのパフォーマンスを届けてくれる。それに対してデュオ・カロリーナ&イヴォは、こっちを見て、と引き込んでくる。注目せざるを得ない状態にさせられたのがあの二人だった気がします。

浦下：曲の激しい場面で、演奏者同士のあおり合いを仕草や目線から感じられたところもしびれた～。フェスタは比較的演奏者との距離が近いから、そういったやりとりを近くで見たい人にもおすすめです。

浦下：続いて、サックス四重奏の**クワチュール・アヴェナ**。衣装も演奏内容も「おフランス」！同じサックスのアンサンブルでもザ・モーニン・フロッグズとはだいぶ雰囲気が違う。

黒川：圧倒的に記憶に残っているのが彼らの試み。1曲目のアイルランド民謡「テンプル・ヒル」では、ソプラノサックス奏者を先頭にして、他の3人が後ろにぎゅっと集まる配置を取っていた。曲が始まったときにその意図がすぐわかった！これはバグパイプを表現しているんだと。



浦下：ザ・モーニン・フロッグズとは違う器用さとか、技術を見ることができましたね。

黒川：サックスってそんなことができるんだ！と、自分たちが知らない楽器の側面を見せてくれた。

浦下：2曲目の「春の海」も、箏の撥弦音をサックスで表現されていて、ここにクワチュール・アヴェナの真髄を感じた。ラストの1音には鳥肌が立ちました。

黒川　あの人たち、どんな音楽でもできるんじゃない？いやー良かった～。

浦下：最後に、ロシアのチェロ四重奏、**クレヴェール・クァルテット**。セミファイナルでは、チャイコフスキーの有名な「ロココの主題による変奏曲」1曲だけで持ち時間を使い切っていた。クラシック一本で来た！と思ったんだよね。

黒川：この曲、私がイメージしていた変奏曲とはちょっと違って、主題がちょっとずつアレンジされていくのかと思いきや、途中から全く違う感じになる…聞いてた話と違う！と思っていた（笑）。

浦下：他の団体とのプログラムの違いが印象的だったよね。そして、ファイナルに進出して何を見せてくれたかというと……



黒川：「ブルガリア組曲」。セミファイナルとのギャップにやられた！すごく激しく動きながら弾いていたのも、めちゃくちゃかっこよかった。

二人が決めた投票先は？

浦下：この4団体から自分が選んだ団体に1票を投じます。このフェスタで金賞を受賞した団体には、2年後に国内でコンサートツアーを行う権利が与えられます。投票は、音楽の優劣をつけるためではなく、「日本の皆さんに届けたい音楽を決める」ためのものと説明されています。実際どの演奏も素晴らしかったですしね。



黒川：私は**クワチュール・アヴェナ**に投票しました。2年後のコンサートで、もっと良いものを見せてくれそうなのは彼らじゃないかと。ザ・モーニン・フロッグズは完成されていると思ったけど、ここで金賞を取らなくても何らかの形で日本で演奏する機会はあるかもしれない。クレヴェール・クァルテットもカッコよかったけど、チェロの四重奏という編成は硬派で、僕が応援したい、みんなに薦めたい「推し」かというとちょっと違うと考えた。

浦下：そう、フェスタの投票先は好みで選んで大丈夫。自分の「推し」に1票を入れて、もし金賞になったら凱旋ツアーがある！と。僕は**デュオ・カロリーナ&イヴォ**に入れました。いろんな団体がクラシックの曲をやっていたけど、一番クラシックの演奏をしてくれたのが、デュオ・カロリーナ&イヴォだった。僕はやっぱりクラシックが好きだから、彼らの音楽を日本の皆さんに聴いてほしいと思って。

浦下：そして、一般審査員投票の結果、金賞に輝いたのは**ザ・モーニン・フロッグズ**でした！

黒川：彼らは完全に聴衆の心をつかんでいて、やっぱり「楽しい」って強いんだなと思いましたね。

浦下：音楽の楽しさが一番伝わってきたし、伝えようとしてくれていたのが大きかった。2028年のグランプリ・コンサートにはぜひお邪魔したいと思います！



「ゆる音楽学ラジオ」YouTubeではお二人のトークをもっとたっぷりご覧いただけます！ザ・モーニン・フロッグズにインタビューした内容など、ファイナルラウンド振り返り全編はこちら▶▶▶



大阪でのvlog! Ensemble SHOWCASEを聴いて気になった団体や、黒川さんの推しバンドについてはこちら▶▶▶

ゆる音楽学ラジオ

「ドラゴンクエスト序曲から交響曲が分かる!?」「ベートーヴェンの交響曲第9番は彼の人生を表している?」など、音楽がより身近に感じられるトピックで毎週更新されています。

YouTube @yuruongaku

各種音声配信サービスでも



Motus Quartet *interview*

グランプリ・コンサート2026
第12回大阪国際室内楽コンクール 第1部門 第1位
モータス・クァルテット インタビュー

文 杉本恵里子（日本室内楽振興財団）

5月のコンクールでは確かな技巧で各ラウンドともバランスの取れた演奏を披露し、第1部門第1位に輝いたモータス・クァルテット。初めての日本ツアー「グランプリ・コンサート2026」がいよいよ11月に開催！コンクールでの思い出や、日本で楽しみにしていることなどを聞きました。ウィーンを拠点に磨き上げられた美しい演奏はもちろん、彼らの素顔にもご注目ください。

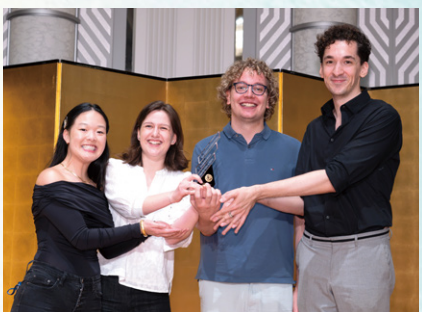
――第12回大阪国際室内楽コンクールを振り返って、印象に残っていることはなんですか？

審査ラウンドで印象に残っているのはやはりファイナルラウンドです。ファイナルに進出できたことがとても嬉しく、同時にほっとしましたし、何より私たちが心から愛しているベートーヴェンの弦楽四重奏曲第12番作品127を演奏できたからです。もうひとつ、忘れられそうにないのが3次ラウンドです。ヴィオラのエリンが本番用の衣装をホテルに忘れてしまい、急いで取りに戻りました。あれは本当にスリリングでした！

演奏以外では、コンクールの運営が素晴らしく行き届いていたことが印象に残っています。スタッフの皆さんは本当に親切で、細やかにサポートしていただき、滞在中はとても快適に過ごすことができました。

――グランプリ・コンサート2026は、皆さんにとって初めての日本ツアーですね。

日本への再訪が待ちきれません。ツアーでは、私たちが情熱を持って取り組んでいる新しいレパートリーを披露します。各地のお客様が今回のプログラムや私たちの演奏をどのように受け止めてくださるか、今からわくわくしています。



――今回のプログラムには、どのようなテーマがありますか？また、作曲家や作品に対して、何か特別な思い入れはありますか？

私たちはウィーンを拠点とする弦楽四重奏団なので、自分たちのルーツとプログラムを結びつけたいと考えています。そのため、ウィーンやオーストリアにゆかりのあるハイドン、モーツァルト、シューベルト、ブラームス、ウェーベルンには、特別な親しみを感じています。

シューベルトの弦楽四重奏曲第15番は、弦楽四重奏というジャンルにおける最も重要

かつ影響力のある作品のひとつだと考えており、演奏できることが楽しみです。また、ブラームスの弦楽四重奏曲第2番は、クァルテット結成当初からずっと演奏してきた大切な名曲です。そして酒井健治さんの弦楽四重奏曲第2番「フローティング・パーティクル」は、私たちが初めて演奏した日本人作曲家の作品です。そういう意味では、プログラム全体のテーマは「原点回帰」（back to the roots）と言えるかもしれません。

今回は、コンクールの時とは違った視点で再び「フローティング・パーティクル」と向き合えることが嬉しいです。さらに自由に、より創造的なアプローチを試すことができるのではないかと思っています。



――5月のコンクールの際は大阪・東京で演奏されましたが、今回は全国10か所以上を訪れます。何か楽しみにしていることはありますか？

メンバー全員、お寿司をはじめ日本食が大好きです。訪れる先々でその土地ならではの料理を味わうとともに、街の雰囲気の違いも感じてみたいです。5月には観光はあまりできなかったので今回は日本の文化にももっと触れてみたいですし、私たちは日本のスキンケア製品も大好きなので、今回はさらにいろいろな商品を試してみるのも楽しみです。

――コンクールでは、審査ラウンドごとに色をそろえた皆さんの衣装がとても素敵でした！特に2次ラウンドのブルー、3次ラウンドのボルドーが印象的でした。衣装の方向性は、どなたが主導して決めているのですか？

気づいてくださってありがとうございます！私たちはステージでの装いについても大切に考えており、衣装は4人全員で相談して決めています。コンクールに出場するときは、審査ラウンドごとに違う色の衣装を着ることが私たちの恒例になりました。今ではちょっとした縁起担ぎのようになっています。

――4人の皆さんのキャラクターや、クァルテットの中での役割を簡単に教えてください。

私たち自身について答えるのは、なかなか難しい質問ですね。4人の性格はかなり違いますが、だからこそお互いをうまく補い合っていると思います。ティム（ヴァイオリン）は生まれながらのリーダータイプ、几帳面でエネルギッシュ。カルラ（ヴァイオリン）はひたむきで正直、そして意志が強い人。エリン（ヴィオラ）は私たちのムードメーカー。陽気でクリエイティブです。ドモンコス（チェロ）は穏やかで、情熱的、そして自信に満ちています。

――ありがとうございました！11月に日本で再びお会いできるのを楽しみにしています。

モータス・クァルテット
Motus Quartet

ティム・デ・フリース（ヴァイオリン）／カルラ・クリシュ（ヴァイオリン）
エリン・カーター・ピッツ（ヴィオラ）／ドモンコス・ハートマン（チェロ）



ウィーンを拠点とするモータス・クァルテットは、2022年にウィーンで学ぶ4人で結成され、ウィーン国立音楽大学（mdw）でヨハネス・マイスルに師事している。更にこれまでに、ハット・バイエルレ、ヴァレンティン・エルベン、エッカルト・ルンゲ、オリヴァー・ヴィレ、グレゴール・ジーグル、エルサレム・クァルテットのメンバーの指導を受けた。とりわけ重要な機会として、ジェルジュ・クルタークと継続的に時を共にしており、彼の「弦楽四重奏のための12のミクロリュード op.13」などの作品や、バルトーク、シューベルトなどの楽曲を学んだ。2026年5月には、今日の主要なコンクールの一つである第12回大阪国際室内楽コンクールで第1位と4つの特別賞を受賞した。それまでにも、2025年3月にワイマールの第10回ヨーゼフ・ヨアヒム国際室内楽コンクールで第1位と古典作品解釈賞、同年9月にトロンハイム国際室内楽コンクールで第3位と委嘱新曲賞、審査委員特別賞を受賞している。現在はヨーロッパ室内楽アカデミー（ECMA）のメンバーであり、これまでにウィーンのコンツェルトハウス、楽友協会、アムステルダムのコンセルトヘボウ、東京のサントリーホール、ロンドンのウィグモアホールでデビューを飾っている。2026年後半には、サントリーホールを含む日本ツアー、ニューヨーク、ワシントンDC、オタワでの北米ツアーや、ホノルル室内楽シリーズへの出演も予定されている。今夏にはデュッセルドルフのシューマンフェスト、ジュリアン・ラクリンが監督を務めるアイゼンシュタットのヘルプスゴルト・フェスティバルに参加した。

グランプリ・コンサート2026 スケジュール

日時	開演	公演地	会場	プログラム
11/14（土）	14:00	熊　本	益城町文化会館	A
11/15（日）	14:00	大　分	くにさき総合文化センター アストホール	A
11/17（火）	14:00	広　島	みどりしんきんホール（庄原市民会館）	特別
11/18（水）	18:45	鳥　取	米子市公会堂	A
11/20（金）	19:00	大　阪	住友生命いずみホール	B
11/21（土）	14:00	三　重	三重県文化会館	A
11/22（日）	14:00	名古屋	宗次ホール	A
11/25（水）	19:00	横　浜	横浜市鶴見区民文化センター サルビアホール	B
11/27（金）	14:00	海老名	海老名市文化会館	A
11/28（土）	14:00	東　京	サントリーホール ブルーローズ	A

プログラムA

W.A.モーツァルト：弦楽四重奏曲第19番
ハ長調 K.465「不協和音」
A.ウェーベルン：弦楽四重奏のための緩徐楽章
J.ブラームス：弦楽四重奏曲第2番 イ短調 op.51-2

プログラムB

F.J.ハイドン：弦楽四重奏曲 ト長調 op.33-5
酒井健治：弦楽四重奏曲第2番「フローティング・パーティクル」
（第12回大阪国際室内楽コンクール委嘱作）
F.シューベルト：弦楽四重奏曲第15番 ト長調 D887

※広島会場は独自のプログラムを予定しています。
詳細は会場からの告知をご参照ください。

プロデューサーが往く！
世界の室内楽の現在

最難関ARD国際音楽コンクールは日米欧のファイナリストによる響宴！

河井 拓（大阪国際室内楽コンクール&フェスタ プロデューサー）


©Daniel Delang
ファイナリストと審査委員

セミファイナルとファイナルの会場となったプリンツレーゲンテン劇場

ドイツ南部に位置して、ベルリン、ハンブルクに次ぐ第3の都市ミュンヘン。千年近い歴史を有する古都市は、ナチスの主要施設があったことから、第2次世界大戦では甚大な戦禍を被ったが、戦後の復興で荘厳な街並みは真に綺麗な姿で再建された。しかし、ナチスに実際に使用されていた当の施設は当時のまま、現在ではヨーロッパ最大級の室内楽教室を有するミュンヘン音大として、多くの室内楽奏者を輩出している。

日本でも有名なビール祭オクトーバーフェストを直前に控えた9月のミュンヘンでは、数百人の若手音楽家が集うARD国際音楽コンクール（日本では通称「ミュンヘンコンクール」）が毎年開催されている。

コンクールの規模として世界随一で、部門を変えて毎年開催しており、1年に4部門同時開催という破格さ。対象楽器も各種ソロ楽器に加えて声楽、弦楽四重奏、木管五重奏、金管五重奏、ピアノデュオ、過去には「初見ピアノ」なる部門まで行われ、「コンクールのデパート」と言われることもあったとか。

また、開催規模だけでなく演奏水準としても難関として知られ、（近年は傾向が変わってきているが）一定レベルに達していなければ一位を出さない事でも有名で、実際に弦楽四重奏部門は過去15回のうち1位を受賞したのは8団体のみ、ピアノ三重奏部門は12回中6団体のみと約半数にとどまっている。だからこそ、ここで優勝することは、真の実力団体という太鼓判を押されることになる。

2026年は第75回コンクールという記念年となる。弦楽四重奏部門はビデオ審査を経て21団体が参加。今年の大阪コンクールからも、ファイナリストのモータス、風雅、渥に加えて、アイラも顔を揃える。

審査委員の顔ぶれもエベーヌ、ハーゲン、モディリアーニ、カザルスのメンバーと室内楽の泰斗であり、審査委員長はアルテミスの最後のヴァイオリン奏者ヴィネタ・サレイカが務める。彼女はアルテミスの後にベルリン・フィル、ロス・フィルのコンサートマスターという異例の経歴の持ち主だが、実は2008年の大阪でダリ・ピアノ・トリオメンバーとして優勝経験もある。

1次ラウンドでは、古典作品と近代作品を演奏し11団体が2次ラウンドに選出される。無事に大阪出場団体は駒を進めた。

続く2次ラウンドではロマン派と現代作品の2曲が課題曲となり、6団体に絞られる。大阪出演組からは、風雅、渥、アイラが残る。

セミファイナルでは、シューベルトの「弦楽四重奏断章」と、委嘱新作のカミーユ・ペパンの「Impermanence」に加えて、ペトリス・ヴァスクスの6曲の弦楽四重奏曲から1曲選択して演奏。ヴァスクスを選択させるのは独特の課題曲だが、審査員長のサレイカが同郷のラトヴィアのベテラン作曲家の80歳を祝福したのだろうか。ヴァスクスの作品は1977年から2019年の長期間に亘って作られていて、特に第1番は作曲を学び始めた直後の最初期の作品である。何番を選択するかによって、楽曲に込められた内容の質が変わってくる。

ペパンはフランス出身の30代女流作曲家で、本課題曲を含めて3曲の弦楽四重奏曲を発表している。ミニマル風にも感じる音楽は揺蕩うように姿を変えていく。楽譜の正確さだけでなく、音色やダイナミックレンジを駆使したムード作りが演奏のキャラクターを分ける作品。

6団体全ての演奏が終了して、第1ヴァイオリンが強くリードするカタリーナ、端正な音楽作りの風雅、安定した重心の響きのヴィアトレスがファイナルラウンドに選出される。

奇しくも、東京のサントリーホール室内楽アカデミーで元東京クァルテットなどに薫陶を受ける風雅、ボストンのニューイングランド音楽院でポール・カッツに学んだカタリーナ、ハノーファー音楽院でオリヴァー・ヴィレに習うヴィアトレスと、日米欧の名伯楽の教えを受けた団体が選出されたことになる。

コンクールはラウンドを重ねるごとに聴衆も増えてきて、ファイナルラウンドでは会場のプリンツレーゲンテン劇場は満員御礼。劇場の外には「チケット求む」の札を掲げた愛好家も溢れるほどだった。

最後のラウンドの課題曲はベートーヴェン又はシューベルトの主要作品と、バルトークの6つの弦楽四重奏曲から選択する2曲を演奏する。プロの弦楽四重奏団としては避けて通れないばかりか、力量の全てが求められる課題曲である。

カタリーナはベートーヴェン13番とバルトーク1番を選び、カヴァティーナで息の長い美音を響かせる。風雅は5月の大阪に引き続きベートーヴェン12番とバルトーク5番を丁寧な音楽づくりで描いた。最後のヴィアトレスはベートーヴェン14番とバルトーク2番。細部までメリハリの効いた楽想表現で、全楽章が繋がる長大なベートーヴェンの作品は会場中の意識を惹き付けた。

1時間ほどの審査会議の後に舞台上で発表されたのは、1位がヴィアトレス、2位は該当団体が無く、3位を風雅とカタリーナで分かち合うという結果だった。聴衆賞と委嘱新作賞もヴィアトレスが受賞したので、彼女たちの演奏が群を抜いて素晴らしかったということだろう。

コンクールというのはキャリアの出発点であり、これからがヴィアトレスを筆頭とした全ての団体の長い旅路になる。日本発の風雅も今秋からハノーファーで新たな研鑽に入るので、今後の更なる成長を期待したい。


©Daniel Delang
優勝したヴィアトレスは終始安定した演奏を披露


©Daniel Delang
ドイツでの留学が始まる風雅は、大阪とミュンヘンでの入賞が現地マーケットへの通行手形になるか

ザ・フェニックスホールに集う
トップアンサンブルシリーズ



ほのカルテット インタビュー

協力：サントリーホール

プログラム
ハイドン：弦楽四重奏曲 ハ長調 op.20-2
メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第6番 ヘ短調 op.80
ブラームス：弦楽四重奏曲第3番 変ロ長調 op.67

インタビュー全文は公式サイトで読めます

大阪国際室内楽コンクール2023第1部門で第2位を獲得後、活躍の幅を広げる弦楽四重奏団ほのカルテットが、今年度のトップアンサンブルシリーズ3公演目に登場します。プログラムの選曲意図や聴きどころを伺いました。

蟹江　ハイドンは自分たちが好きで、積極的に取り組みたい作曲家なんです。最初に受けた宗次ホール弦楽四重奏コンクールでは第3位に加えて「ハイドン賞」をいただき、その後古典派作品の演奏で評価していただくこともあって、プログラムを組む時にはハイドンの楽曲から選ぶことが多いです。作品20-2は、チェロのメロディから始まる華やかな雰囲気の曲。ハイドンの弦楽四重奏曲は作品33以降に重要な作品が多いと言われることもありますけど、実はそれ以前にもこんなにいい曲がある。この曲が今のほのカルテットに合うと思って決めました。

林　余白が多くて自由度が高い曲が、今の自分たちにしっくりくるのかなと思っています。テンポの変化や装飾の入れ方とか、各々が「こういうふうにやりたい」ということを織り交ぜていける。ハイドンの曲は楽譜に書いてあることをとにかく忠実に弾くというよりは、自分たちが感じたことを、どのように音楽にブレンドしていくかも大切だと思います。そういう自由さが今の自分たちに合っている気がします。

メンデルスゾーンの6番は、2023年の大阪国際室内楽コンクールに参加する前にも一度弾いたことがある曲。5番の華やかな雰囲気から一転する、6番ならではの深さや重さを改めて表現したいと思って選曲しました。

岸本　大阪のコンクールで5番を選曲したこともあって、メンデルスゾーンの弦楽四重奏曲の中で私たちが一番多く弾いてきたのが5番です。今回はその5番とのつながりという意味でも、6番を選びました。

蟹江　メンデルスゾーンが死と強く向き合っていることが感じられる作品は異例だと思います。そうした作曲家の一面にも触れていただけたら。

長田　**ブラームス**の3番は、初めて取り組む曲。ほのカルテットとしてブラームスの弦楽四重奏曲を演奏すること自体が初めてなので、挑戦です！1番、2番を経て書かれたこの3番は、ブラームスの弦楽四重奏曲の集大成だと思っています。とても壮大で、弦楽四重奏の枠を飛び出そうとしているようなスケールを感じます。ブラームスの思いが伝わるような演奏をしたいです。

岸本　大阪のコンクールでの受賞から3年以上が経ちました。聴いてくださるお客様に自分たちの変化や成長を感じていただき、その感想を伺えることはとても嬉しいことだと感じています。

林　コンクール後は国内外で色々な演奏機会に恵まれ、もっとこうしたい、こうあるべきといったメンバー間のディスカッションも以前よりぐっと増えました。自分たちの音楽がどう成熟してきたのか、ぜひ聴いていただけたらと思います。



ほのカルテット HONO Quartet

岸本 萌乃加（ヴァイオリン）、林 周雅（ヴァイオリン）、長田 健志（ヴィオラ）、蟹江 慶行（チェロ）

2018年1月東京藝術大学在学中に結成。始動半年で第4回宗次ホール弦楽四重奏コンクールで第3位およびハイドン賞（課題曲賞）を受賞。2019年5月に第8回秋吉台音楽コンクール弦楽四重奏部門で第1位受賞。2021年度プロジェクトQ・第19章に参加。2023年5月に大阪国際室内楽コンクール2023第1部門（弦楽四重奏）において、日本人団体として過去最高の第2位およびアンバサダー賞を受賞。2024年12月にミュンヘンで開催された室内楽フェスティバル「メンシュ-クラング-ラウム・ビエンナーレ」に、同コンクールのアンバサダーとして参加。2020年に松尾学術振興財団の奨学金を受ける。
これまでに松原勝也、市坪俊彦の各氏に師事。現在は山崎伸子氏の元で研鑽を積んでいる。これまでに、ヘンシェル・クァルテット、クァルテット・エクセルシオ、澤和樹、山崎伸子、鈴木康浩、村治佳織の各氏と共演。
サントリーホール室内楽アカデミー第7・8期フェロー。

2027 1/31（日）15:00開演　［会場］あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール
一般 ¥4,000／ザ・フェニックスホール友の会 ¥3,600／学生（25歳以下） ¥1,500

チケット取扱
- ザ・フェニックスホール チケットセンター 06-6363-7999
- チケットぴあ、イープラス

主催：公益財団法人日本室内楽振興財団 ／あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

お知らせ

ヴァイオリンの岸本萌乃加さんは、出産のため今回の公演への出演を見合わせる運びとなりました。代わりまして、石原悠企（ゆうき）さん（読売日本交響楽団首席第2ヴァイオリン奏者）が出演します。演目に変更はございません。出演者変更に伴うチケットの払い戻しはございません。何卒ご了承ください。





ロシアの民族楽器

ロシア民謡は有名だが、それを伴奏する様々な楽器も興味深い

ロシア音楽と言えば、クラシック音楽の世界ではチャイコフスキーなど盛んに演奏されているが、ロシアの民謡も第2次大戦後の一時期、日本でも盛んに演奏されていた。民謡では「カチューシャ」や「赤いサラファン」など、筆者も子ども時代に良く歌っていたような気がする。

構成・文／片桐卓也

1956年福島県生まれ。大学在学中からフリーランスの編集者&ライターとして活動を始める。1990年頃から本格的にクラシック音楽の取材・執筆を始め、現在はクラシック音楽専門誌などに、演奏家のインタビューや、コンサートの批評などを書いている。好きな音楽ジャンルはバロック時代の音楽とジャズ。

vol.7 RUSSIA

民族楽器で旅する世界



バラライカ

ロシアの民族楽器と言えばいちばん最初に思い付くのがバラライカだろう。基本的に弦は3弦のギターのような弦楽器で、高い音を出せるほうから、ピッコロ～プリマ～セクンダ～アルト～バス～コントラバスなど、たくさんの種類があるので、これだけでアンサンブルが出来る。ボディの部分が三角錐の形となっているのが特徴で、後ろ側は丸みを帯びた形なので、抱えて演奏することが出来るように考えられている。19世紀末頃に現在の形に改良されたそうだ。これはプリマ・バラライカで最もよく使われるバラライカ。いちばん高い音を出す弦は金属製で、それ以外の2弦はナイロン弦を使っているそうだ。右手で弾いて音を出す。



バラライカには音程によってたくさんの種類があると書いたが、これは最も小さいピッコロ・バラライカである。持ちやすいと思うが、歌の伴奏にはあまり登場しないようだ。主にバラライカ・アンサンブルの高音担当として活躍する。それでも弦は3本あり、三角錐のボディは同じ形状をしている。バラライカはサイズがたくさんあるので、この小さなサイズなら、割と年齢の低いお子さんでも演奏できそうだ。ロシアでの演奏の映像を観てみると、子どもたちのアンサンブルもあり、この小さなバラライカを使っているように思えた。ヴァイオリンでも2分の1、4分の3、などフルサイズとは違う子ども用のサイズの楽器が存在しているのと同じなのだろう。

バヤン



ロシア式アコーディオンである。他のアコーディオンとの大きな違いは、鍵盤が無く、すべてがボタン式のアコーディオンであること。それは同じアコーディオン属のバンドネオン（アルゼンチンタンゴに使われている）と同様と言えるだろう。ロシアでもウクライナでも使われており、ロシア式クロマティック・アコーディオンとも呼ばれる。「トロイカ」の歌詞にでてくる<バイヤン>とはこの楽器のことを指すようである。こちらは楽器としての発祥が分かっており、1907年にステゴリフという人が発案し、それ以降も改良を加えて、バラライカ・アンサンブルの一部にも取り入れられるようになった。イタリア式のボタン型クロマティック・アコーディオンの機構を参考にして1929年に現在の形となったという。



ローシュキ

これはロシアの民族舞踏の伴奏に欠かせない楽器である。ローシュキはスプーンを意味する言葉のようで、これを自在に叩きながらダンスをする。同じ木製の打楽器としてはカスタネットの役割に近いだろう。カスタネットは2枚の木を叩く訳だが、ローシュキは3本使うのが基本のようで、さらに4本、5本での使い方もある。単に叩くだけでなく、こするように叩くことで独特の音が出る。アンサンブルでもよく使われており、このローシュキとバラライカが伴奏して民謡が歌われることも多い。日本ではほとんど見ない楽器だが、ヨーロッパ各地にはトルコ、ギリシャなどでもスプーン型の打楽器を使うこともある。中央アジアにも同じような楽器がある。

ドムラ



こちらは丸いボディに3〜4本の弦を張った弦楽器だ。表側も丸い形だが、裏側も丸みをおびたボディとなっており、ちょっとマンドリンにも似た姿をしている。12世紀頃のモンゴル民族の侵入と共にロシアに渡って来て、それ以降、ロシアの各地で使われるようになったと言われる。しかし、17世紀頃にはツァー（当時のロシア皇帝）の命令によって民族楽器が破壊されるようになり、次第にドムラは姿を消し、バラライカに置き換えられるようになったと言われる。それでも演奏する音楽家は消えることがなく、現在でも3弦のドムラ、4弦のドムラそれぞれに名演奏家と呼ばれる人が出ているように、民族音楽には欠かせない楽器として使われている。

トレスショトカ



何枚かの木の板をロープなどで結びつけて、それを揺らして鳴らしながら音楽の伴奏をする打楽器である。歴史が古く古代のスラヴ時代からある楽器だそうだが、確かにオーク（樫の木）の音を聴くと古代のイメージがわいて来るだろう。ポーランドには<カート・ラトル>という民族楽器があり、それは木製のカートに木の歯車を付け、その上に板を置いて、カートを転がすと板から音が出るという不思議な楽器だが、金属が貴重な時代には、そうした木製の楽器（打楽器、弦楽器を含めて）がたくさんあったに違いない。それを現代に伝えるひとつがこのロシアのトレスショトカ。その演奏に出会うことは現地でなければ難しいと思うが、一度聴いてみたい。

グスリ



放浪する詩人や歌手たちが使う楽器には、このグスリと同じように竪琴のような形をした弦楽器が多い。ロシアでは伝統的にこのグスリが使われ、中世ではロシア正教会によって使用が禁止されていたこともある。現在ではこの兜型のグスリの他に、箱形の鍵盤グスリという楽器も使われており、時代によってかなり楽器の改良が進んだことを示している。兜型のグスリは30本ほどの弦を張って、それを指先で弾いて演奏する。箱形の鍵盤グスリはもっと弦の数が多く、爪を付けて演奏する。兜型のグスリは西欧ではツィターと呼ばれる楽器の仲間ともされ、民族音楽には欠かせない、アルペジオの伴奏に適した楽器とも言われる。



バラライカにはたくさんの大きさがあり、それだけでアンサンブルが出来るように、音程の違うバラライカが考えられた。その中でも最も大きいのがコントラバス・バラライカで、普通のオーケストラのコントラバスのようにいちばん低い音を出せる弦楽器として重要な役割を持っている。いちど「テレム・カルテット」というロシアの民族音楽を演奏する団体が来日し、その演奏を聴いたことがあるが、その時にこのコントラバス・バラライカを使っていて、その大きさにびっくりした。もちろん膝に乗せて演奏が出来ないので、三角形のひとつの部分を台のような物に乗せて、まさにコントラバスのように演奏しているのが、ちょっとユーモラスだった。

こういう場所で聴ける

かつてはロシア民謡をみんなで歌う、そんな時代もあった

カラオケではなく〈歌声（うたごえ）喫茶〉を知っている、行ったことがある方は、もう私と同じ70代以上が多いはず。その名称を聞くだけでもノスタルジーの薫りが漂う。歌声喫茶ではなぜかロシア民謡がよく歌われていたので、バラライカを目にする機会も時にはあったのだ。現在では、クラシック音楽以外のロシア音楽を聴こうとすると、なかなか難しい。いちばん可能性があるのは、ロシア料理の専門店で、時々、音楽ライブ付きのイベントを開催するという機会だろう。まずはお近くのロシア料理店に時々、食べに行って、そうしたイベントがないかどうかチェックしてみて欲しい。決して多くはないが、ロシアからやってくるグループの公演が国内各地で行われることもある。

それ以外では、日本でロシア民族音楽をずっと演奏している団体がいくつかあり、その発表会という形でコンサートが行われているようだ。これも地域が限られてしまうけれど、ＷＥＢ上で検索してみると、偶然にそのコンサートに出会えるかもしれない。あるいは個人の趣味としてバラライカを演奏したり、シルクロードに関連した音楽を演奏したりする方のライブなどを検索してみよう。

Johann Sebastian Bach
バッハとケーテン、ライプツィヒ



ケーテン城の庭園。バッハは子供達とこの庭園で遊んだと言われています。

世俗音楽に没頭したケーテンから大学都市ライプツィヒへ。バッハの、人間味あふれる日常と素顔に迫ります。

終の住処と決めたケーテンからの、突然の旅立ち

1717年、バッハは、およそ9年半にわたって仕えたヴァイマルを離れ、約112キロメートル離れたケーテンへと移住しました。この引っ越しは非常に大掛かりで、妻マリア・バルバラと4人の子供、さらには妻の未婚の姉も同行し、家族は6名にまで増えていました。

ケーテンはカルヴァン派を信仰する公国であったため、ルター派のバッハには教会音楽を書く義務がありませんでした。そこで彼は宮廷楽長として、宮廷行事のための音楽や、君主レオポルト侯が希望する世俗音楽や器楽作品の創作に没頭し、《ブランデンブルク協奏曲》や、《無伴奏チェロ組曲》といった、歴史的な名曲を次々と紡ぎ出しています。事実、彼は理解あるレオポルト侯のもとで、この地を終の住処にし、宮廷楽長として生涯を終えようと本気で考えていました。



ケーテンの街並み。(右の赤い建物はバッハがケーテン時代最後に住んだと言われている家です)

しかし1720年、最愛の妻が急死し、翌1721年に彼は宮廷歌手であったアンナ・マグダレーナと再婚します。そして、増大し続ける家族を養うため、彼は生活基盤を根本から見直さざるを得なくなりました。子供が増えたことで家も手狭になり、生活費もかさむ中、頼みの綱であった宮廷の音楽予算は徐々に縮小されていきました。その最大の理由は、レオポルト侯が音楽に全く関心のない王女と結婚し、彼自身の音楽への情熱が冷めてしまったことにありました。増える家族を養うお金を稼ぐため、バッハは大学都市であり、商業の中心地でもあるライプツィヒという新天地へと目を向けたのです。

第3希望の補欠合格!?大学都市ライプツィヒでの多忙な日々

1723年、バッハは、大学都市であるライプツィヒの聖トーマス教会のカントル(合唱長)および市の音楽監督の職に応募します。彼はそこで個人レッスンの生徒を多く獲得し、生活の糧にしようと目論んでいたのです。しかし驚くべきことに、現在では「音楽の父」として神格化されているバッハも、当時の採用試験においては、補欠3番目だったのです。しかし、上位合格者だったテレマンやグラウプナーが運良く辞退したことで、バッハが繰り上げで合格者となりました。

こうして赴任したライプツィヒでの生活は、想像を絶するほど多忙なものでした。バッハはトーマス学校の教員として月曜日から水曜日の午前


聖トーマス教会内のバッハの墓。

中と金曜日の昼に音楽の授業を担当し、聖トーマス教会と聖ニコライ教会などでカンタータや受難曲を定期的に演奏する責任者を務めました。礼拝での教会カンタータの演奏は年に60回程度、受難曲の演奏は年に1回、さらに不定期な結婚式や葬儀を含めると毎年120回以上の教会礼拝の音楽を取り仕切っていたのです。週末には3つの礼拝が重なり、のんびりとした休日は完全に過去のものとなってしまいました。

カフェに入り浸る バッハの素顔

多忙を極める教会業務の傍らで、活気ある市民文化にも深く関わりました。その中心となったのが、大学生や音楽愛好家、プロの音楽家によって構成される、コレギウム・ムジクムです。この団体は1701年にテレマンが創設したもので、バッハは1729年からその指導を引き受けました。彼らは、ライプツィヒで最も有名なコーヒーハウス「カフェ・ツィンマーマン」を拠点としました。冬の期間は金曜日の夜8時から10時まで店内の大広間で、夏の期間は水曜日の午後4時から6時まで城壁の外にある郊外のコーヒー園で、年間を通じて毎週のように定期演奏会を開催したのです。店主のツィンマーマンは自ら楽器を買い揃えて楽団を支援し、客にコーヒーや食事を楽しませました。

バッハはこの活気あるカフェの空間で、数多くの世俗カンタータや器楽作品を披露しました。その代表作が、《コーヒー・カンタータ》です。当時流行していたコーヒーをテーマに、娘にコーヒーをやめさせようと激怒する頑固な父親と、「コーヒーを飲ませてくれる夫としか結婚しない」と譲らないおしゃべりな娘の姿をユーモラスに描いたこの喜劇は、当時の市民生活を面白おかしく切り取っています。バッハ自身も、カフェに足繁く通い、コーヒーやワインの香りに包まれながら学生たちと音楽を心から楽しんでいました。

そんなバッハの自宅もまた、カフェに負けず劣らず活気に満ちていました。次男のカール・フィリップが後に「我が家はまるで鳩小屋のようだった」と回想するように、彼の家には音楽家や学生たちが絶えず出入りし、楽譜の販売や楽器の貸し出しなども行われていました。二人の妻との間に20人もの子供をもうけたバッハは、最も人間らしい生活を誠実に生きた人物でもあります。

厳格で気難しいイメージを持たれがちなバッハですが、実は他人の音楽を聴くのが大好きな親しみやすい性格でした。教会でフーガが演奏される際、隣に座る長男ヴィルヘルム・フリーデマンに「この主題なら次はこう展開させるべきだ」と嬉々として予言しました。そして作曲者が期待通りの展開を見せると、悦びのあまり息子の脇腹をツンツンと小突いて喜んだといいます。街のコーヒーハウスに集う人々の喧騒を愛し、家では子供たちと笑い合う。大学都市ライプツィヒで躍動したバッハの足跡には、世俗の喜びを謳歌する、血の通った一人の人間としての温かい素顔が刻まれています。


ライプツィヒ、聖ニコライ教会。ライプツィヒのカントル職のオーディションはここでも行われました。


ライプツィヒでバッハが住んでいた聖トーマス教会付属の建物。

大井 駿（文&写真）

指揮者、ピアニスト、古楽器奏者。1993年、東京都出身。第1回ひろしま国際指揮者コンクールにて優勝。第21回ハチャトゥリアン国際コンクール指揮部門第2位、古典派交響曲ベストパフォーマンス賞受賞。パリ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、バーゼルにて、ピアノと指揮と古楽を学ぶ。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、広島交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団等と共演。



Dmitri Dmitriyevich Shostakovich

旅に出たくなったから書いた？ ショスタコーヴィチの ピアノ五重奏曲

名曲 第6回 誕生！

ショスタコーヴィチといえば、ソ連という独裁国家で当局の抑圧に苦しみながら作品を生み出した印象が強いが、ピアノ五重奏曲は例外的にのびのびとした開放感あふれる作品だ。なぜそんなにハッピーなのか。

飯尾洋一（音楽ライター）

著書に『クラシックBOOK この一冊で読んで聴いて10倍楽しめる!』新装版（三笠書房）、『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修（朝日新聞出版）他。テレビ朝日「題名のない音楽会」音楽アドバイザーなど放送の分野でも活動する。

20歳のショスタコーヴィチ、ショパンに挑む

1927年に開催された第1回のショパン・コンクールに、20歳のショスタコーヴィチが出場していたことはご存じだろうか。ショスタコーヴィチはすぐれたピアニストでもあった。ソ連代表の4人のピアニストのひとりとして参加し、本選ではショパンのピアノ協奏曲第1番を演奏した。本人の手ごたえは上々。母親への手紙には「自分か同僚のレフ・オボーリンのどちらかが優勝するとだれもが噂している」と記している。

実際に優勝したのはオボーリンだった。ショスタコーヴィチは優勝を逃したばかりか、第4位までの入賞にも届かず、名誉賞に終わる。伝えられるところによると、ショスタコーヴィチは「非情緒的なショパンを弾いた」そうなので（いかにもな話ではある）、ポーランド人主体の審査員とは相性がよくなかったのかもしれない。当時、虫垂炎で苦しんでいたので、その影響が出た可能性もある。母親への手紙には「失敗したとはまったく思っていない。満足しているから心配いらない」と書いているが、はたして内心はどうだったのか。

仲間と旅するための ピアノ五重奏曲

その後、作曲家として名声を得た後も、ショスタコーヴィチはしばしば舞台上でピアノを演奏している。1940年に作曲されたピアノ五重奏曲も、自身がピアノを弾く前提で書かれている。ショスタコーヴィチに作曲を依頼したのは、モスクワ音楽院の卒業生によって結成されたベートーヴェン四重奏団。ショスタコーヴィチはベートーヴェン四重奏団のメンバーたちを同世代の兄貴分として慕っていた。彼らとは長年にわたる友情を育み、室内楽分野における重要なパートナーとなる。

ショスタコーヴィチは当初、ベートーヴェン四重奏団のために弦楽四重奏曲を書くつもりだったが、自分も演奏に加わるようにと、ピアノ五重奏曲に構想を改めた。ショスタコーヴィチは親友のイサーク・グリークマンにこう語っている。

「なぜ四重奏曲にピアノを加えたかわかるかい？ 僕自身が弾けるようにして、あちこちへ演奏旅行に出かける口実を作るためだよ。ピアノ五重奏にすれば、ベートーヴェン四重奏団は僕なしでツアーに出られなくなる。僕も世界を見て回れるというわけさ」

グリークマンが本気なのかと尋ねると、「もちろん本気だ。僕は筋金入りの旅好きなんだ」と返答された。グリークマンにはこれが本気なのか冗談なのか、判別がつかなかった。





狙い通り、ピアノ五重奏曲は大成功を収めて、ショスタコーヴィチはベートーヴェン四重奏団と各地で共演することになる。初演は1940年11月23日、モスクワにて。聴衆は熱狂し、全5楽章が演奏されたあと、第4楽章「間奏曲」と第5楽章「終曲」がアンコールとして演奏され、さらには第3楽章「スケルツォ」まで演奏されることになった。聴衆は立ち上がって作曲者と演奏者に長い拍手を送った。公演後、ショスタコーヴィチは興奮して、まっすぐ家に帰らず、幸せな気持ちでモスクワの街を歩き回ったという。

初演が大評判を呼んだため、ベートーヴェン四重奏団とショスタコーヴィチにはソ連各地から出演依頼が殺到することになった。しかも、この曲の人気は初演直後に留まらず、その後も長くピアニスト・ショスタコーヴィチのレパートリーに定着することになった。初演から18年を経た1958年には、ベートーヴェン四重奏団とともにブルガリアへの演奏旅行に出かけて演奏している。旅をするために自分が演奏する曲を書く。その目的はおそらく本人の期待以上に達せられたのではないだろうか。

古典の衣をまといながらも、自由に軽やかに

ショスタコーヴィチ作品では珍しいことに、ピアノ五重奏曲は聴衆からも批評家からも当局からも歓迎された幸福な作品となった。第1回のスターリン賞を受賞し、ショスタコーヴィチは多額の賞金を手にしている。

全5楽章の構成は独特だ。

序盤はバロック音楽のスタイルを模したかのように始まる。第1楽章がのびやかな「前奏曲」、第2楽章が「フーガ」。バッハでおなじみの「前奏曲とフーガ」セットだ。もっともフーガはあまりフーガらしくはないが……。擬古的なのはここまで。第3楽章はショスタコーヴィチ得意のエネルギッシュな「スケルツォ」。開放的で、まっすぐなユーモアがある。第4楽章「間奏曲」は内省的な歌の音楽。そして第5楽章「終曲」は思いのほか、軽やかだ。明らかに作曲家はいつもよりリラックスして楽しんでいる。この親密な雰囲気と作曲者自身がステージに立ったことが、ピアノ五重奏曲の成功の要因だろう。

ショスタコーヴィチにとって、多くの場合、旅とは公的な要請に従った職務でもあった。それでも気のおけない仲間たちとの演奏旅行は少なからず気分転換になったにちがいない。そう思って聴けば、終楽章には旅を心待ちにするような気分さえ感じられるのではないだろうか。

音源 おすすめ

ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲ト短調 作品57

Vanguard Classics、Doremi、他

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（ピアノ）、ベートーヴェン四重奏団

すぐれた奏者たちによる録音がたくさんリリースされているので、音源はよりどりみどりだろう。しかし、あえてひとつだけを選ぶなら、作曲者本人とベートーヴェン四重奏団による初演コンビの録音を挙げないわけにはいかない。このコンビには1940年と1955年の録音が残っている。入手容易なのは後者で、同じ録音が数多くのレーベルから発売されている。ショスタコーヴィチの名ピアニストぶりを確かめることができる貴重な録音だ。

Spotifyなど、ストリーミングサービスでも聴けます！

主催事業レポート

調査研究事業

こどもクラシック ミュージックアトリエ vol.10



撮影：栗山圭税

「こどもクラシック ミュージックアトリエ」は、調査研究事業「子ども向け音楽プログラム開発」の研究の一環として、2022年より住友生命いずみホールと共同で実施しています。ステージの上、演奏者のすぐ近くに観客席を設け、音楽を間近で感じられることが特長の「ミュージックアトリエ」。今回のテーマは「**変奏曲**」！耳なじみのある「きらきら星」や「ハッピーバースデー」などの音楽が、次々とイメージを変えて登場。変奏ごとにがらっと変わる雰囲気を味わっていただきました。みんなで手拍子をして8分音符と三連符のリズムを交互に刻み、音楽の変化を楽しむ場面も👏

そして、公演の前後には毎回恒例となったヴァイオリン体験コーナーも大人気でした！🎻



2026.8/14(金) ①11:00-12:00 参加者 24組69名 ②14:00-15:00 参加者 26組71名

住友生命いずみホール

対象：小学生とその保護者
料金：無料（事前応募によるご招待）
出演：クァルテット・アトリエ
ヴァイオリン：上敷領 藍子、相原 瞳
ヴィオラ：後藤 彩子
チェロ：佐藤 響
主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団
住友生命いずみホール（一般財団法人 住友生命福祉文化財団）
後援：読売テレビ、大阪市

演奏曲

モーツァルト（ダンクラ編曲）：きらきら星変奏曲
モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク　より
ハイドン：弦楽四重奏曲「皇帝」第2楽章
ハイドリッヒ：ハッピーバースデー変奏曲 より
ハルヴォルセン：ヘンデルの主題によるサラバンドと変奏
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第10番「ハープ」第4楽章

お客様の声（アンケートより抜粋）

♪演奏を目の前で見られて迫力満点でした。
♪きらきら星とハッピーバースデーの変奏曲では、子どもがリズムや調性の変化に耳を傾けていました。
あれ？いつもと違う？不思議そうにする場面もありました。
♪リズム遊びは、手で叩いて音が変化していく様子を体で感じ取れたし、ゲームみたいでとても楽しかったそうです。

共催事業レポート

ゴルトムント弦楽四重奏団 公開マスタークラス



2026.9/6(日) 草津アミカホール

講師：**ゴルトムント弦楽四重奏団**
ヴァイオリン：フロリアン・シェッツ、ピンカス・アット
ヴィオラ：クリストフ・ヴァンドーリ
チェロ：ラファエル・パラトーレ
通訳：後藤 彩子（ヴィオラ奏者）
主催：滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール　共催：公益財団法人 日本室内楽振興財団



©Nikolaj Lund

2009年の結成以来メルボルン国際室内楽コンクールでの優勝など華々しい経歴を重ね、国際的に高い評価を得ているゴルトムント弦楽四重奏団。そのメンバー4人による公開マスタークラスを、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールとの共催で開催しました。受講生は、弦楽四重奏を学ぶ2組の若手グループ。ゴルトムントのメンバーは交代で登場し、時折実演を交えながら、作曲家の意図や楽曲の背景を踏まえた熱のこもったアドバイスを送りました。世界で活躍する演奏家の言葉や音に直接触れた時間は、若い奏者たちにとって気づきと刺激を得る貴重な機会となったことと思います。また聴衆にとっても、アドバイスを受けるたびに演奏が変化していく様子を間近で感じられる興味深い時間になりました。

受講生・曲目

びわ湖ミュージックハーベスト受講生（2025年度の受講生によるカルテット）



ヴェーベルン：
弦楽四重奏のための5つの楽章 第1楽章

モーツァルト：
アイネ・クライネ・ナハトムジーク 第1楽章

ボヌール・カルテット（京都市立芸術大学2回生によるカルテット）



ボロディン：
弦楽四重奏曲第2番 第1楽章

NEWS

■ 2026（令和8）年度 第1回理事会

開　　催：2026年6月3日（水） ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2025（令和7）年度事業報告書及び決算報告書
② 2026（令和8）年度定時評議員会の招集と議題
③ 助成金選考委員承認（改選期）
選考委員：青澤 隆明（評論）
宇野 文夫（作曲家・神戸学院大学教授）
沼野 雄司（桐朋学園大学・大学院教授）
横原 千史（評論）
三枝 まり（小田原短期大学准教授）
④ 事務局長承認
報告事項：代表理事、業務執行理事選定
会長・理事長・常務理事の職務執行状況
第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ実施状況

■ 2026（令和8）年度 定時評議員会

開　　催：2026年6月22日（月） ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2025（令和7）年度事業報告書及び決算報告書
② 評議員7名の辞任と評議員7名の選任
新任評議員：岩田 正昭（清水建設）
福冨 直子（積水化学工業）
来田 一夫（竹中工務店）
前田 敦（NTT西日本）
貝田 康則（ニュー・オータニ）
藤田 宏文（野村證券）
南方 裕之（読売テレビ放送）
③ 理事・監事全員選任（改選期）
報告事項：選考委員承認 事務局長承認 代表理事、業務執行理事選定
第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ実施状況

【理事・監事】

会　　長　松本 正義（関西経済連合会）
理 事 長　松田 陽三（読売テレビ放送）
常務理事　山内 隆行（日本室内楽振興財団）
理　　事　林 直久（大阪ガス）
奥戸 義昌（関西電力）
山本 卓彦（サントリーホールディングス）
並木 秀明（住友生命保険）
芝 道雄（ダイキン工業）
音居 哲也（西日本旅客鉄道）
長井 大地（読売新聞大阪本社）
高津 英泰（日本室内楽振興財団）
音楽理事　堤 剛（チェリスト サントリー芸術財団）
監　　事　川﨑 宏大（三井住友銀行）
吉田 満（読売テレビ放送）

■ 2026（令和8）年度 助成金募集について

2027年度の助成金交付事業の募集は2026年10月31日（土）をもって締め切らせていただきました。申請されたものについては2027年1月に開催を予定している選考委員会で審議いたします。なお2028年度の助成金募集については2027年秋に実施する予定です。

お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団
電話／06-6947-2183　　ウェブサイト https://jcmf.or.jp

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

住友電気工業株式会社
ソニーグループ株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック ホールディングス株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社関西みらい銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
大樹生命保険株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社

野村證券株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

東洋紡株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

カナデビア株式会社
川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
ダイキン工業株式会社
日本製鉄株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
株式会社NANKAI
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社JTB
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

KDDI株式会社
NTT西日本株式会社

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

（関連業種別 五十音順）

メールで最新情報をお届け! 奏メールメンバーズ
室内楽をますます楽しんでいただけるような情報を不定期でメール配信中！一部主催公演でのご招待や割引情報もご案内します。ぜひご登録ください！

編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団　〒540-8510　大阪市中央区城見1丁目3-50　TEL.06-6947-2183　FAX.06-6947-2198　https://jcmf.or.jp
Vol.66　令和8年11月2日　　編集：高津英泰、杉本恵里子　表紙イラスト：Mié　協力：高坂はる香

編集後記　グランプリ・コンサート2026に出演するモータス・クァルテットは、オーストリア・ウィーンを拠点に活動する四重奏団。今号の表紙はオーストリアのモチーフを散りばめたイラストをMiéさんに描き下ろしていただきました。チターやシュタイリッシェハーモニカといったアルプスの民族楽器にウインナホルン、ウィーン菓子の数々、薔薇のティーウェアなど……眺めているだけでオーストリアへ旅したくなります!

JTB 感動のそばに、いつも。



心安らぐ秋のひとときを

秋は風が心地よく、散策が楽しい季節になります。
山々が色づき始めるこの時期は、ゆったりとした時間の流れを求めて、
のんびりと出かける旅が良いのではないでしょうか。

いつもの景色から少し離れて、秋の彩りに包まれるひとときを過ごし、
この時期の醍醐味である秋の味覚を是非お楽しみください。
JTBでは、日常を忘れて心からリフレッシュできる、
そんな素敵な旅の思い出作りをお手伝いいたします。

この秋、皆様も心安らぐ旅に出かけてみてください。

㈱JTB大阪第二事業部
〒530-0004
大阪市北区堂島浜 1-1-27 大阪堂島浜タワー7階
TEL:050-1732-4529(代)　FAX:06-6676-8964
担当:髙岡 純平

編集・発行／JCMF 公益財団法人 日本室内楽振興財団
〒540-8510　大阪市中央区城見1丁目3-50
TEL.06-6947-2183　FAX.06-6947-2198
https://jcmf.or.jp